

高瀬川だより

NPO法人京都高瀬川繁栄会報
編集人 田村佐起三

〒六〇四一八〇〇一
京都市中京区木屋町通三条上ル
電話 (〇七五) 二二二二・一八二八

京都市京セラ美術館

3月21日～4月5日

《開館記念展「京都の美術250年の夢」》

本展では同館のコレクションの核である「京都の美術を全国から集めて展示。文化庁をはじめ、宮内庁三の丸尚蔵館、東京と京都の国立博物館、東京と京都の国立近代美術館、東京藝術大学美術館などから出品される伊藤若冲、曾我蕭白、円山応挙、竹内栖鳳、上村松園、堂本印象といった作家たちの400点を超える作品を三部構成で紹介する。これに加え新館「東山キユーブ」では杉本博司の個展「杉本博司 瑠璃の浄土」を6月14日まで開催する。

かつて6つの大寺院が存在していた地に立つ当美術館のリニューアルにあたり杉本は「仮想の御寺の荘厳」を構想。世界初公開となる大判のカラー作品シリーズ「OPTICKS」やガラスにまつわる様々な作品や考古遺物を展示。瑠璃「浄土」偏光色をキーワードに杉本の創作活動について考えるところにも「浄土を追求してきた日本人の心の在り様」を見つめ直すとしている。

京都国立近代美術館

3月6日～5月10日

《チエコデザイン100年展》

芸術家アルフォンソ・ミュシヤ(ムハ)が生まれ、またフランス絵画から影響を受けたチエコ・キユビズムと呼ばれる独自の様式を生み出したチエコ。さらに、アニメやおもちゃに至るまで20世紀のチエコは世界を魅了する数々のデザインを生み出した国として知られています。しかし、その100年を振り返れば、戦争や占領そして政変といった刻々と変わる国家の情勢にデザイナーたちが翻弄された世紀でもありました。

本展はチエコ・デザイン100年を家具やプロダクト、ポスターなどチエコ国立プラハ工芸美術館所蔵の作品を中心とした約200点の作品により紹介します。歴史軸に沿って紹介される作品はチエコひいてはヨーロッパの情勢が20世紀のデザインに与えた影響の一面を示すものとなるでしょう。

私の本棚 おすすめの一冊 粉川 剛

《MMT現代貨幣理論とは何か/井上智洋著》

MMTは日本経済の救世主になれるのか? ⑤
通常国会が召集された。野党は「桜を見る会」問題や逮捕者まで出た「カジノ法案」、「政治とカネ」をめぐる不祥事などで与党との対決姿勢を強めている。確かにそれらは重要ではあるうが今後は国民生活に直結する新型コロナウィルス対策とデフレ脱却・景気回復を論点としてもらいたい。アベノミクスを失敗という立憲民主党は「ポトムアップ経済ビジョン」を提唱しているが果たしてデフレから脱却できるのか疑問が残る。野党はイデオロギーではなく有効な政策で与党に對して欲しい。アメリカの民主党左派はMMTによる経済政策を提言しておりMMTを社会主義的政策と捉えている方も多いようであるが理論としてのMMTは中立であり、その運営方法が問われる。意外ではあるが日本では保守論客の中に支持者が多い。日本が再浮上出来るよう一度真剣にMMTを考えるべきでは?

土口哲光和尚の説法

《三日見ぬ間の桜かな》

厳しい冬に耐えて、生命の躍動する春を喜ぶかのように咲く桜、愛でる日が近づく。桜は、秋になつて気温が下がると休眠に入り、その後、冬の低温期を経験して休眠から目覚める。気温が上がれば開花できる状態を保ち、春を待つのである。

古来から「三日見ぬ間の桜かな」という桜に寄せた人生訓話がある。桜は瞬く間に咲いて、サツと散りゆくところから、人は変化し見違えるように成長する者もいる。逆に威張っていた者が、真つ逆さまに落ちて散りゆく場合もある。今生は「諸行無常」である。万物は常に変化し、少しの間もとどまらない。人生とは問題を生き抜くことで、苦を苦として引つかからない。楽を楽として腰をおろさない。桜が今年も、説法してこくる。

季節の家庭料理 田村 真紀

《三月 揚げ鶏の新玉ねぎあん》

《作り方・四人分》

鶏もも肉二枚(厚みを広げ、醤油・酒各大匙一をよく揉みこんでおく)・新玉ねぎ一個・スナックエンドウ十二個(塩ゆでする)☆(水二カップ半・鶏ガラスープの素大匙一・胡椒少々)・水溶性片栗粉(片栗粉大匙二を同量の水で溶く)
新玉ねぎは縦半分に分けてから五ミリ幅に切る。フライパンに油をひき、新玉ねぎをしんなりするまで炒める。☆を加え中火で三分ほど煮たら、水溶性片栗粉を加えてとろみをつけ、スナックエンドウを加える。鶏もも肉に片栗粉(分量外)をまんべんなくまぶし、百七十度の油でこんがりするまで揚げる。仕上げに強火にして約一分揚げ食べやすい大きさにカットし、新玉ねぎあんをかける。

つれづれの記 山崎 辰巳

《ルールとマナー》

京都のみならず各地で観光公害が悩ましい。さらには東京五輪への民族大移動で、この問題はますます過熱しそうだ。特に言語・習慣・価値観の異なる人種が集まる観光スポットでは、常識を超え、想像できないトラブルや事件、事故が発生する恐れがある。

こうした事態に備えて、自治体はもとより旅行・観光関連業は、どのような対策や危機管理体制を講じているだろうか? 普段我々は「ルール」と「マナー」という一定の規範によって秩序が保たれている。前者は規則で違反すれば罰せられ、後者は行儀・作法のことで罰せられはしないが、その場に相応しい品位や礼儀が求められる。多くの観光客が訪れる京都。迎える側の市民一人ひとりもルールやマナーを守り、率先してトラブルの予防に努めたいものだ。